小津安二郎の企画上映が行われていて、小津映画の『秋刀魚の味』をみました。

このリュミエール兄弟の映画館「プルミエ・フィルム」だけでなく、フランス各地には日本ではあまり見かけることのない少し変わった映画館があります。なかでも私の記憶に強く残っているのは、フランス西部の都市ナントにある映画館「ル・シネマトグラフ」です。ナントの旧市街にあるこの映画館の特徴はなんと言っても、元々カルメル修道会の礼拝所（チャペル）だった建物を使っている点です。歴史を紐解くと、元は 17 世紀に作られた礼拝所がフランス革命の時代に修道会が追放され牢獄として使われるなどした後、20 世紀になって映画館として使われるようになったようです。この「ル・シネマトグラフ」も新作映画だけでなく、「プルミエ・フィルム」のように名作映画を安い料金で見られるようにしています。フランスでは日本に比べて安い料金(大体一作品 600 円前後)で映画を見られますが、現在は日本のように郊外型のシネコンが増えています。しかし街中には上記のようないわゆるアート系シアターもまだまだ頑張っています。私が留学していたル・マンの街には、中世の街並みがそのまま残る旧市街に貴族の古い館を使った「シネポッシュ」がありました。このシネポッシュがのちに街の中心部に「レ・シネアスト」として新しくオープンします。留学中にはこの映画館でたくさんの映画を見ました。日本映画もたまに上映されていて、是枝裕和監督の作品はどれも人気でした。

ナントの映画館「ル・シネマトグラフ」

フランスで人気の日本映画は、ジブリアニメはもちろん小津や是枝のような家族をテーマにした作品です。最後におすすめのフランス映画について。フランソワ・オゾンやセドリック・クラピッシュの監督作品はどれもオススメです。他にも 2006 年のオムニバス映画『パリ、ジュテーム』もフランス映画の入門としてぜひ一度見てください。

リュミエール兄弟の銅像

出典：https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Yekaterinburg_Lumiere_brothers_monument.JPG

エーリヒ・ケストナーは映画でも面白い！

文学部　河合　まゆみ

ドイツ文学の映画化作品を授業で紹介することがありますが、そういう時、学生さんから文句なしに面白いと言ってもらえるのがケストナー作品の映画です。みなさんはエーリヒ・ケストナー（Erich Kästner 1899-1974）を知っていますか？世界的に有名な児童文学作家で、『エーミールと探偵たち』『飛ぶ教室』『ふたりのロッテ』などの傑作があります。実際に読んだことがなくても、名前くらい聞いたことがあるのではないでしょうか。ケストナーの作品は度々映画化されており、どの原作小説も映画もほんとうに面白くておすすめなのですが、なかでもイチオシが『エーミールと探偵たち』です。

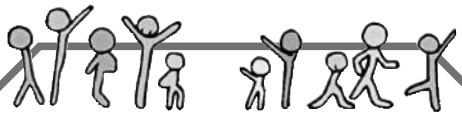
この映画を観た学生さんたちからは、最初は子供向けの映画だろうと少し高をくくっているところもあるのでしょうが、「途中から引き込まれてしまった」「思わず見入ってしまった」という感想が返ってきます。

『エーミールと探偵たち』（Emil und die Detektive 1929 年）は、ケストナーの最初の児童文学作品で、世界各国語に翻訳されて人気を博し、彼の名前を一躍有名にしました。ここでケストナーの家庭環境について一言。ケストナーの両親は夫婦仲が悪く、母親は一人息子のケストナーを溺愛して育てました。（ケストナーのほんとうの父親は一家の主治医であったZ博士だという話まであります。）ケストナーも母親の期待に応えようと一生懸命で、その分父親とは疎遠になりました。こうした母親と息子の親密な関係が、作品にも織り込まれていて、とくに『エーミールと探偵たち』にはそれが顕著にみられます。では、なぜケストナーは主人公に、革職人であった自分の父親の名前エーミールを与えたのでしょう。作中、エーミールの父親は死んだという設定になっていますが、このあたりにケストナーの父親に対する微妙な心情が垣間見れます。

さて『エーミールと探偵たち』ですが、1931年に本国ドイツで初映画化されて以来、日本を含めた世界各国で度々映画化されています。ドイツでは、1931 年、1954 年、2001 年とこれまで 3 回映画化されていますが、なかでも 1931 年の初映画化は、のちにハリウッドで映画監督として活躍するビリー・ワイルダーが脚本を手掛けており、当時、ドイツだけでなくアメリカやイギリスでも大成功をおさめました。ケストナー自身、映画製作に積極的にかかわり、その出来栄えには概ね満足だったようで、みずからカメオ出演もしています。この 1931 年の映画は日本で DVD 化されていないため、残念ながら字幕付きで観ることはできませんが、初期トーキーのモノクロ作品で、列車の中でエーミールが見る悪夢、大戦前の大都市ベルリンでタクシーに乗っての追跡劇、泥棒が泊まるホテルの部屋にエーミールが忍び込むなど、後続の映画化にも引き継がれる見どころシーン満載です。

この初回の映画化作品は、多くの映画化のなかで最高の出来という評価を得ていますが、私がここでお勧めしたいのは、また学生さんたちの評価も高いのが 2001 年の映画化作品です。これは日本でもＤＶＤ化されているので、字幕付きで鑑賞できます。ケストナーの生誕 100 周年を記念したこの映画化では、女性監督フランツィスカ・ブーフがかなり大胆に原作に変更を加えています。それは一言でいえば、ジェンダーの転換です。まず主人公エーミールが母子家庭から父子家庭に置き換えられています。家庭を捨て海外へ行った母親にはすでに別の相手がおり、エーミールは失業中の父親と再統一後の旧東ドイツで貧しいながらも二人心通わせて暮らしています。最初にこの映画を観て、冒頭でエーミール父子が登場した時、「ここを変えちゃいますか！？」と驚いたことを覚えています。この映画では、エーミールの波乱万丈の冒険は、すべて父親への愛情から発していますが、息子の愛情に、対象が母親か父親かの違いはなく、映画を観ていくうちに違和感は消え、どこか情けないが憎めない父親（原作の母親はひたすら強い！）を放っておけないエーミールに共感していました。二つ目の注目点は、ベルリンの子どもたちのリーダーを男の子のグスタフから女の子のポニー（原作では主人公の従妹）に変更したことです。彼女は正義感と行動力にあふれ、仲間の少年少女をみごとに差配します。また勇気と機知を兼ね備え、泥棒が宿泊するホテルの部屋のマスターキーを見事に手に入れてみせもします。三つ目ですが、エーミールのベルリン行きは、クラスの担任のフンメル先生からベルリンに住む先生の妹のところにしばらく滞在するようすすめられたからですが、

この妹がなんと牧師という設定です。こう書いても、みなさんにはあまりピンとこないかもしれませんが、キリスト教でもプロテスタントでは教派によっては女性も牧師になれますし、牧師は結婚も許されています。しかしカトリックではいまだに神父は男性のみであり、妻帯も許されていません。映画中で、祭服を着たフンメル牧師が車を運転中、運転に文句をつけた車にむかって中指を立てるシーンがありますが、相手の驚愕ぶりが印象的でした。父子家庭のエーミール、父母が離婚の危機にさらされているポニー、女手一つで息子グスタフを育てるフンメル牧師と、現代ドイツの家庭事情が反映されています。また映画の舞台となっている再統一後のベルリンも、多文化共生を目指す首都として描かれていて、エーミールを助けてくれる子どもたちが様々な民族の出自となっているのも映画の魅力の一つです。ぜひ一度観てください！



ギリシアの映画監督テオ・アンゲロプロス（1935-2012）：ヨーロッパの周辺を知るために

経営学部　島田　　了

学生の皆さんは2010年の欧州債務危機というのをご存知でしょうか。ユーロ危機ともいわれ、ギリシア政府の粉飾決算が暴露されたことからユーロ関連の経済危機が連鎖しておこった事件です。これにより、ギリシア経済の脆弱さとユーロ加盟諸国間の格差が浮き彫りになりました。

美しいエーゲ海と白亜に輝く古代神殿のポスターとともに紹介されることの多いギリシアですが、その歴史は困難の多いものでした。2世紀以降はローマの支配下に、15世紀以降はオスマン帝国の支配下にありました。19世紀になりオスマン帝国の弱体化と西欧列強の介入により、1900年ぶりにギリシア人の国家が復活することになりました。1832年にバイエルンの王子を国王に迎えギリシア王国が成立します。しかし政治は安定せずに後継者として新たにデンマークの王子を新国王として迎えることになります。その後もクーデターによる共和制の成立、王政の復活など不安定な状態が続きます。第二次世界大戦には連合国側として参戦するも、1941年にはドイツの侵略を受け、占領状態に置かれます。

第二次世界大戦後は連合国によって解放されますが、1946年からは王党派右派と共産主義左派との対立からギリシア内戦が勃発します。1949年に内戦は終結し、1950年には総選挙の結果、保守連立政権が発足、さらに翌年の選挙によりようやく政局は安定するかと思われました。

しかし1960年代に中道左派が躍進すると、これを警戒する軍のクーデターがおき、その後軍事独裁政権が成立して、国内で厳しい弾圧が行なわれます。1970年代に国民の不満、学生による大規模なデモなどの抗議活動が活発になります。1974年の軍事独裁政権の崩壊後初の選挙により、君主制の廃止・民主制への意向が決定され、民主主義が回復されます。それからは大きな混乱もなく安定をつづけ、1981年にヨーロッパ共同体（ヨーロッパ連合の前身）に加盟を果たしたのでした。

長々と歴史の話をしましたが、こうした複雑で困難な背景をギリシアは背負っているのです。この複雑なギリシアの現代史とじかに向かい合ったのが、テオ・アンゲロプロス監督で、彼の代表作が『旅芸人の記録』（1975年）です。1936年から1975年までのギリシア現代史をあつかった、4時間弱（232分）という長い映画です。歴史を扱ったといってもただのドキュメンタリー映画ではありません。旅芸人の一座が